

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

ラクゴ・ザ・フューチャー

第四十八回…小さいネタ見つけた

文…田中啓文

めっちゃ忙しい。死ぬほど忙しい。考えられないぐらい忙しい。毎日毎日朝から晩まで、いや、昼から明け方までずーっと仕事をしているが、まるで片づかない。まるで売れっ子的ようだが、そうではない。仕事の六割以上は原稿料の出ない原稿、つまり、無料の原稿なのである。原稿を書いてお金をとってこそプロ。そういう考えもあるだろう。そういう意味では私はプロではない（余談だが、小学生の頃、雑誌のマンガなどの表紙に書いてある石森プロとか手塚プロの「プロ」と書いてた）。では、残りの四割は全部お金になるのか、というところではない。一割ほどは没原稿、つまり、編集者に渡してはみたものの、突っ返された原稿である。「田中はん、こんなもんで金取れると思ってなはんのか。あんた、小説をなめとるんとちゃうか」「いや、そういうわけでは……」「とにかく書き直してもらいまひよか。他にも頼む相手はなんぼでもいてまんねんで」というようなことがたまにあるのだ。では、残りの三割は全部お金になるのか、というところではない。二割五分ほどは書き損じ、つまり、書いてはみたものの、使いもんにならないなあ、という屑原稿、カス原稿、どつちやうかなあ。あかんかなあ。あかんわなあ。でも、こそつと混ぜていたらわからんのちゃうか。いやいやそれではなあ……」というようになちよつとましなものから、世界中のどん

な言語の国の人に読ませても「紙クズ」の一言で片づけられてしまうような最悪のものまで含まれている。では、残りの五分は全部お金になるのか、というところではない。これは、「お金になるかもしれない可能性がある原稿」である。書いて、掲載されたけど、お金が振り込まれなかった、ということもたまにある。最初から「原稿料は出まへんで」と言われていた場合はいいのだが、こっちは仕事のつもりでいる、むこうはタダのつもりでいると、非常に情けない目にあうことになる。だいぶ前のことだが、ある雑誌に20枚ぐらいのイラストのようなものを書き、表紙にも大きく名前が載ったのだが、いつまでたってもお金をくれないので、その雑誌に書いている他のライターに電話してきいてみたら、「ああ、あそこはお金なんかくれないよ」とのことでした。皆さん、ライターやら作家やら目指してもらくなことにはならんからやめたほうがいいですよ。

というふうに「あ、忙し、あ、忙し」といいながら毎日を送っていたのだが、ふと気づくともうラクゴ・ザ・フューチャーのしめ切りが来ているではないか。前回と前々回は三題嚙を募集するという手口で楽をさせてもらったが、さすがに三度続けて三題嚙ネタというわけにもいかない。仏の顔も三題嚙。しかたなく、今回、小ネタ集とさせていただきます。すいませんね。

といっても、ただの小ネタ集ではない。私は常日頃から、なんかネタはないかネタはないかとハイエナのようにサバンナをほっつき歩いているのだが、それらしいものが落ちていても、拾ってみたらたいがい「だめだこりゃ」「なものであることが多い。たとえば、「サバンナに触んな」とか。ね、どうしようもないでしょ。また、ときには「これはまあまあのネタやけど、いったいどこに使うねん」というようなもの

を拾ってしまうことがある。つまり、ギャグというものは複
 合であって、単体で成り立つものではない。一つのギャグが
 次のギャグを生み、それがまた次……というふうに連鎖反応
 的につながっていき、全体が有機的に結びついて、はじめて
 大きな笑いが生まれるのであり、書く側もそうなるよう意図
 しているのである。だから、どことも結びつけることができ
 ないネタはだめなのであるが、かといって捨てるにはあまり
 に惜しい。というわけで、今回は、「捨てるには惜しいけど、
 置いといてもしやあない小さなネタ」特集です。
 では、どーぞ。

・三匹の会話

狼「このままでは二人ともやられちまうぜ、どうする、馬よ」

馬「どうするといわれてもどうしようもねえ」

豚「わしは豚やネ」

狼「わかってるわい、そんなこと。それよりこの事態を何
 とかするんだ。いい知恵はないか」

馬「ここまで追い詰められちまったら知恵も糞もない。

思い切って突破するだけさ」

狼「いちかばちか、か……」

豚「わしは豚やネ」

狼「わかってるちゅうとんねん。おまえは黙つとれ。

……しかし、それでは三人とも死んでしまうぞ」

馬「そうだな……よし、わかった。俺がおとりになってや
 つらを引きつけておく。そのあいだに、狼、あんたは
 逃げる」

狼「何だと、おまえにそんなまねはさせられねえ」

馬「どちらかが生き残らなければならぬ。それはあんた
 の役目さ。あんたは組織にとってこれからも必要な存

在だ」

豚「わしは豚やけどネ」

狼「黙ってえちゆうねん。じゃあ、おまえは俺に生きのびるといふのか」

馬「そうさ。狼は生きる」

豚「豚、わしネ！」

・プロレス道

これは明日のプロレスラーを夢見る二人の少年の物語である。富山県在住の中学生、風呂礼素道雄は大のプロレスファン。なかでもアントニオ猪木の大ファンであった。同級生の才野茂とともにプロレス同好会を結成し、日夜トレーニングにはげんでいたが、あるとき、二人で出した猪木へのファンレターに返事がきた。「君たちはまるでこぼこコンビだねえ。これからもプロレスを応援してくれたまえ」と書かれたそのハガキを握りしめ、風呂礼素道雄と才野茂は「絶対にプロレスラーになって、猪木先生のようなすばらしい試合をするんだ」と夜空に誓うのだった。

なるう、なるう、明日なるう

明日は猪木になるう

・夜の遠泳

夜の遠泳はつらい。水が冷たいし、眠気が襲ってくる。だが、水を掻く手をとめたら、たちまち溺れてしまう。この遠泳で一位になれば、今度の国際大会に出場する資格を得ることが出来る。がんばらねば。でも……眠い。うちの水泳部

の人間関係は最悪だ。吉岡と俺と町田のうち誰が国際大会への出場権を手中にできるかは微妙だ。三人のなかでは俺が頭ひとつ抜けている気がするが、油断はならない。コンディション次第では、吉岡や町田に負ける可能性だってあるのだ。すぐ後ろから水音が迫ってくる。吉岡か……町田か……。俺は振り返ることなく、腕を強く回した。やつらに負けてなるものか。絶対に……絶対に勝つのだ。だが……眠たい。まぶたが重くなる。きのうの徹夜麻雀が今頃きいてきやがった。くそつ、今ががんばりどころじゃないか。そのとき、突然、俺は背後から首をしめられた。ごぼごぼがごぼ。苦しい。誰だ、こんなことをするのは。吉岡か……町田か……それとも……意識が遠くなる。暗い海が俺の身体を包む。俺は……。

気がついたとき、俺は病院のベッドのうえで寝かされていた。見たことのない中年男が俺の顔をのぞきこんでいた。彼は刑事だと名乗り、俺に言った。

「遠泳中に溺れたということだが、泳ぎのうまい君がいったいどうしたのかね」

俺は答えた。

「スイマーに襲われたんです」

・一揆

「誰にも気づかれなくてねえべか」

「だいじょぶだ」

「よし、それじゃ今から村の寄り合いをはじめろ。とにかく今度の代官はむちゃくちゃだ」

「なんだ。今年は日照りで米がまるでとれねえちゅうのに、年貢を去年の二倍に引き上げると抜かしやがる。とんでもね

えこった」

「これじゃあ、娘を売るしかねえ」

「おめえのここはまだましだ。売る娘が残つとるからのう。」

うちは、もう去年、一番下の娘まで売っちゃった。今年は首くるしかねえ」

「おらんとこもだ」

「おらんとこもだ」

「こつうなたらもう、一揆しかねえすら」

「やるしかねえすらよ」

「だがのう、一揆をすりゃあ、首謀者はとつつかまって、

はりつけ獄門だ。いくら代官が悪いと言ったって、馬鹿を見るのはいつもおらたち百姓だ。それでもやるだか」

「やるしかねえ。殺されたってやるしかねえんだ」

「そうじゃな。わしらに残された道はそれしかねえ。死ぬしかねえんだ」

「死のう。みんな、死ぬ覚悟でやるんじゃ」

「死のう、死のう。そう思ったら笑いがこみあげてくるぞ。」

うはははははははは」

「うはははははははははは」

「うはははははははははははは。死のう、死のう」

「死のう、哄笑じゃ。うはははははははははははは」

・病院にて

「山田さーん、お熱はいかがですかー。げぼっ」

「今、はかっています。えーと、三十六度五分です」

「平熱ですね。三十六度五分と……どこか苦しいところはないですかー。げぼっ」

「ありません」

「わかりました。じゃあ、お休みなさーい。げぼっ。向井さーん、お熱はいかがですかー。げぼっ」

「はい、三十八度です」

「ちよっと微熱があるみたいですねー。痛みはどうですかー。げぼっ」

「少し、脇腹が痛いですけど……」

「眠れないようでしたらナースコール押してくださいねー、すぐに参りますからー。げぼっ」

「ありがとうございます。それにしても、普段は気がつかないけれど、こうやって悪いところが見つかって入院すると、看護婦さんのたいへんさがよくわかりますよ」

「あら、そうですかー。げぼっ」

「お医者さんもしんごい職業だとは思いますが、看護婦さんはそれ以上ですよ。夜勤があったり、汚いものを処理したり、わがままな入院患者をつまくさばいたり……ほんとに頭がさがりますよ。白衣の天使っていうけどほんとですよ」

「あらー、そんなにはめても何も出ませんよー、おほほほほほほ。げぼっ」

「とじろで、看護婦さん、さっきから何をげぼげぼいってるんですか。口から変なものを吐き出しては、また口に入れて、飲み込んでますけど……」

「おほほほほ。私は自分の内臓を吐き出しては、また、それを飲み込むという習性があるんですよ。ナマコみたいなもんですかね。吐く胃の天使といっています……。げぼっ」

「げぼっ」

・ドリフターズ

ちゃんちゃかちゃんちゃん、ちゃんちゃんちゃん、ちゃんち

やかちゃんちゃん、ちゃんちゃんちゃん

（「タブー」のメロディがトランペットで演奏される）

「何者だっ、それがしを柳生十兵衛三蔵と知ってのことかっ」

「……………」

「今の太刀筋、一刀流とみた。小野派一刀流浦風新右衛門…」

「…図星であろうがっ」

「……………」

「なぜ、わしを斬ろうとする。わけを申せ」

「……………」

「言わぬか。ふっふっふ……………ならば、よい。おぬしの命、も

らうまでじゃ。来るがよいっ。だあーっ」

「とっーっ」

「むむむ、なかなかやるな。おぬし、隙がないぞ」

「あんたも隙ねえーっ」

というわけで、「捨てるには惜しいけど、置いていてもし

ゃあない小さなネタ」でした。えっ？ 捨ててもぜんぜん惜

しくない？ うーん、私も今読み返していて、そう思います

た。次回はどうなるのでしょうか。

（了）